

角川選書

# 作家は行動する

—文体について—

江藤 淳



—19—

江 藤 淳 じゅん

昭和八年東京豊多摩郡に生まれる。  
昭和三十年、「夏目漱石論」を『三田文学』に載せる。好評を博す。昭和三十一年、慶応義塾大学英文科を卒業。その後評論活動に入り、評論集『神話の克服』『奴隸の思想を排す』『海賊の唄』等を刊行。評論『小林秀雄』で新潮文学賞を受く。現在『季刊藝術』同人。「江藤淳著作集」(全六巻)がある。

角川選書 19

作家は行動する

昭和44年5月30日 初版発行  
昭和47年9月30日 3版発行

著者 江 藤 淳  
発行者 角 川 源 義  
印刷者 中 内 佐 光

発行所

株式会社 かどかわしよてん  
角川書店

東京都千代田区富士見2-13 ☎195208  
TEL. 東京(265)7111(大代表) ☎102

Printed in Japan

映印刷・宮田製本

0395 - 703019 - 0946(1)



日文701456728

92494

角川選書

# 作家は行動する

—文体について—

江 藤 淳



19

角川書店

装  
丁

日

下

弘

## 選書版に際して

この本が書かれたのは、今からちょうど十年前である。爾来、多少の文壇的反撥はあったが、ここで私が試みようとしたことを、文学的に発展させた労作には、接することができなかった。わずかに吉本隆明氏の「言語にとって美とはなにか」に、この本のモティーフの反響があるが、そこでは言語・文体といったものが科学的にとらえられすぎている。これは吉本氏の言語観・世界観の根柢にあるマルクス主義の拘束のためである。そして私の目的は、つねに言語を科学的・決定論的世界観の網の目から解放することにある。

ここに収録されているテキストは、初版当時のものの完全な復元で、一字の訂正も行われていない。どんな本もそうであるように、この本のある部分に一九五九年の目付が刻印されていることは否定しがたいが、半面私はここで試みようとしたことが、今日ようやく理解されはじめていることを予感しているからである。おそらく崩れるべきものはもっと崩れたほうがよく、幻滅も挫折も致命的であればあるほどよい。それにもかかわらず生きようとしたとき、人ははじめて言葉に出逢う。これはまた、私にとっては最初の書き下しの本でもある。私は印税を前借りし、講談社の別館にこもってこれを書きあげた。現在講談社インターナショナルにいる川島勝氏が、私を叱咤し、激励

してくれたことをなつかしく思い出さずにはいられない。初版の装釘は石原慎太郎氏がしてくれた。今度角川選書に収めるにあたってお世話になった川橋さんに対してと同じように、あらためてこれらの人々に深く感謝したい。

一九六九年四月二十二日

江 藤 淳

## 目次

選書版に際して

三

作家は行動する  
(I)

七

一 言語と文体

八

二 文体と時間

元

三 散文の文体と詩

五

四 想像力

六

五 小説の文体

一〇

作家は行動する  
(II)

一三

新しい文体 (I) —— 新しい作家の文体 ——

一四

(1) 想像力 —— 大江健三郎 ——

一六

(2) 「純粹行為」とアクチュアリティ——石原慎太郎——

一四三

(3) 美的対象としての文体——三島由紀夫——

一五二

新しい文体(Ⅱ)——第一次戦後派の文体——

一六〇

## 散文家たち

二〇五

初版あとがき

二四〇

解説

秋山 駿

二四三

作家は行動する

( I )

## 一 言語と文体

文学作品はことばで書かれる。文体論というものは、文学作品を意識的にことばの面から批評することである。これは犬が西むきや尾は東というのと同じ程度にわかりきった話であるが、それからさきはいっこうにわかりきっていない。つまり、文体批評の出発点は言語の批評にある。これは家を建てようと思ったら、土台からかためてかからなければならぬというのと同じことであって、ものごとを本質的に論じるとはもともとこのような態度のことをいう。

しかし、現在世間に氾濫している「本質論」のたぐいはがいてこのようなものではない。人間の存在や行動の問題である文学の問題が、主として技術の問題であるなどというのはこのような「本質論」の特徴であるが、世の中に一切の問題が主として技術の問題であるような人間は原則的にいつて存在しない。あらゆる人間にとって、自分の行動の究極の責任は自分自身にある。もし幸にして究極の責任をとってくれるものが自分の上に存在し、そっちに下駄をあずけておいてもよいことになれば、技術論がはじめて本質論になりうる事情が生れる。たとえば当世流行の「殺し屋」にとつて、一切の問題は任意の相手を消す技術上の問題である。責任をとってくれるのは親方か身代りであつて、彼の責任は最初から無制限に解除されている。彼にとつては、自分の生きかたなど

というものを問う必要はない。世界を破壊する装置のスイッチをおしても、それは彼の責任ではない。AにやとわれればAのために、BにやとわれればBのために、彼はコルトの引金をひけばいいので、彼には立場をとる必要がない。しかし、不幸にして「殺し屋」以外の人間は誰一人人間以外のものに自分の責任をゆだねることはできない。だとすれば、自分の生きかた、つまり存在や行動の問題を置いて、どこに本質的な問題があるか？ 「技術批評」||「本質論」という等式をかくことは、「非存在」||「人間」というような等式を仮定することと同じであって、このような思想の根底には、本質的に無責任な、自分の存在を解消しようというずるさがある。

私の考えでは、言語の批評を行うことは、この問題と密接な関係をもっている。人間にとって、消音装置付きのピストルは、つかわないでもすむものにすぎないが、ことばはそのようなものではない。ピストルは道具であろう。しかし、ことばは自分の外側にある道具ではない。四六時中、だまってつつ立っているときでも、われわれはたえず言語活動をおこなない、ことばにとりまかれていく。しかも人間のことばというものは、文字や発音されたことばだけではない。身ぶり、指さすこと、それは広義のことばである。ある土人たちは文字のかわりに繩のむすびめをことばとしているというが、その場合、むすびめをこしらえるという行動はひとつの言語活動である。簡単にいえば、人間の行動はすべて一種のことばである。そして人間の行動を人間の存在からきりはなすことはできない。それは手足が身体からきりはなされてひとりでに動くことができるというのと同じである。文体を技術的に論じるといふことは、したがって、ことばを、道具として、あるいは身体から

きりはなされて盆踊りをおどっている手足のようなものとして論じることである。それがナ  
ンセンスであることはいうまでもない。文体は書きあらわされた行動の過程——人間の行動の軌跡  
である。かつてフローベールは、「文体とはもののみかたである」といった。それは十九世紀的な文  
体観の代表であるが、われわれの生きているのは一九五九年の日本であつて十九世紀後半のフラン  
スではない。

ことばを気のむいたときにつかい、気のむかぬときにはなしですませる道具のようなものと考  
えるのは、過去の言語観の特徴である。ことばの並べかたを主として、問題にする技術批評は、アリ  
ストテレス以来今日まで連綿と信奉されている過去の言語観をその論拠にしているが、このような  
言語観の特徴は、ことばが人間の外側にある実体——ものだと考えるところにある。つまり、それ  
はコルトのピストルそのものと、「ピストル」ということばを同じ次元にあるものだと考えることで  
ある。「ピストル」の場合には、ことばともののあいだに一対一の対応が成立しているから、さし  
あたつての不都合はないかに見える。しかし、それが「勇氣」とか、「妥協」とかいうようなことば  
になるとそれは問屋がおろさない。われわれは「勇氣」というものを横丁の三ちゃんから借用して  
きて愚連隊とケンカをするわけではない。それは愚連隊に対してある状況のもとでわれわれの示し  
た行為の名前にすぎない。「妥協」もまた愚連隊とわれわれとの間に成立する行為であつて、もの  
ではない。しかし過去の言語観は、行為や過程までもものとしてとらえるような性質をもっている、  
哲学的にいえばこれは実体論——リアリズム——の言語観であり、そこでは言語は客観的な實在だ

と考えられている。われわれはできあがりの世界を、あるがままにことばを通じてうけいれ、そのことばは個々のものにはりついているということになる。ここから、ことばを生きた実体——「言霊」——と考える原始人たちの言語観にいたる距離はほんの一步でしかない。

現実の描写とか、模写とかいうリアリズムの文学理論は、このような、ことばを外在的な実体とする前提の上にはじめて成立するものであるが、奇妙なことには、現在の日本の技術批評家たちは、文体やイメージなどを勝手にいじくりまわせる道具——外在的なものと考えながら、一方でリアリズム理論を否定し、「想像力」の解放などという主観主義理論をとなえている。彼らは自分で自分の首をしめるような議論を知らずにおこなっているわけであって、そこでは認識論と技術論が分離している。これは頭と手足のバラバラになった人間が俺は生きていると主張するようなもので、ふざけた話というほかはない。それが「理論」として通用しているのは、日本の文学者の大部分がすくいがたい精神の怠惰にむしばまれ、論理的ないかげんさに対して寛容であるためである。

ことばはものではない。一種の記号である。しかもそれは客観的に人間の外側にあるもの、外在的な実体ではない。人間の主体的な行為と不可分のものである。つまり、ことばは文字ではない。外人に道をきかれて左を指すという行為は、ひとつの記号活動、ことばのはたらきである。この行為が私という存在ときりはなしえないということ、それがこの場合の主体的という意味である。このようにして記号であることばの次元と、実体であるものの次元とは別々のものだということになる。この二つの次元のあいだには、はっきりした断絶がある。もし断絶がないということになれば、

どんな不都合がおこるか。その場合、われわれはものを考えたり、想像したり分析したりすることができなくなる。なぜなら、われわれはことばによってもものを考えるのに、そのことばはこの場合、具体的なものにしばりつけられているということになるから。そしてものを考えるということは、自分の周囲の直接的な感覚の世界から自由になることである。ことばが具体的なものにしばりつけられていれば、私は一般的な「机」、まるいのや四角いのやニスをぬったのやきずだらけのや、などのことを絶対に考えられなくなって、いま眼の前にある鎌倉彫りの机のことしか考えられなくなる。そんな馬鹿な話があるわけではない。

現在の技術批評家たちの錦の御旗である「想像力」なるものも、もし「ことば」と「もの」の次元がわかれていなければ不可能になる。のちにくわしく論じる予定であるが、イメージはものではなく、存在でもない。しかも彼らは小説の構造とか、道具立てをもちだして、小説における「想像力」なるものは、ロマンティックな道具立てをそろえさえすれば達成できるものであるかのように主張する。それは、作家の主體的な行為のあらわれである作品を、できあがりのものとしてあつかい、作品から一切の人間の痕跡を消してしまおうとすることである。そこでは人間よりも、ものが尊いとされ、おそらく生きているものより死物の方が尊いとされる。これは典型的な「殺し屋」の論理であるが、もしかりに文学作品が道ばたの石ころより価値があるとするなら、それはどの場所よりもそのなかに、作家の凝縮された行動があるからである。花びらをあつめてセメダインでくつつけても花にはならない。かりに造花はできるとしても。作品は人間的な行動の軌跡であって、死物で

はない。

こうして、ことばが外在的な客体でないことはあきらかになった。それは記号であり、人間の行動と不可分のものである。しかし、それならことばはまったくアブリオリに人間に賦与されたものだといえるだろうか。生れながらに人間の持つ、肉体化されたものだろうか。たとえばサルトルはことばをそのようなものと考え、彼によれば、それは人間が生れながらにもっている「触角」のようなものであって、人間はあたかも昆虫が「触角」で現実にあふれるように、この「触角」をさしのばし、現実をつくりだしていく。それまでは、世界はあの「嘔吐」の主人公の見たマロニエの木の根っこのような不定形のドロドロしたものにはすぎない。「触角」がふれた瞬間に、それは「机」になり、ブリジッド・バルドオになり、岸信介氏の顔になる。つまり人間は客観的な世界をそのままうけいれているのではない、ドロドロのものの世界をくぎり、かため、現実につくりあげるのだという。その区切るといふ行為をおこなうのがことばという「触角」のはたらきである。

おおむね、この考え方は正しい。心理学者たちが実験的に証明するところによると、われわれは赤いバラの花を直接感覚しているとき、花びらのかたちやおくゆきなどをみていうのではなく、漠然とした赤いひろがりだけをみているのだという。それに輪郭や深みをあたえるのはわれわれの知覚のはたらきであって、直接的な感覚から知覚にうつるときわれわれはことばを介在させて対象を区切っている。知覚は主体的行為である。赤ん坊やある種の精神病の患者にとっての赤いバラの花は、ただの赤いひろがりにはすぎない。

しかし、もしことばがまったくアプリアリなものであれば、任意のAとBという二人の人間の知覚はまったく同一でなければならぬ。極端なことをいえば世界は一つの言語しか持たないことになる。だが実際には、たとえば英国人はあらゆる線を直線、ねじまがった線、カーヴ、ジグザグの四つに分類する(E・サビーア)が、われわれはまったくすぐなのとまがったとの二種類に分類する。これは英国人と日本人の知覚の型がちがうことを証明するものであろう。またもし、サルトルのいうようにことばが全く主観的なものであれば、AとBとが共通の知覚を持つということは全く蓋然的なものとなり、そこに伝達の可能性はなくなり、人間はおたがい孤絶するであらう。なぜなら伝達行為はあらかじめ承認された客観的な基準の上にはじめて成立するからである。

すでにのべたように、ことばは客観的な実体ではない。しかしそれはアプリアリなものではなく、まったく肉化された主観的なものでもない。世界には有限個の言語があり、しかもその一つ一つの言語のなかでの知覚の型はある種の客観性を持っている。ことばは主體的な記号であるが、その記号はある種の客観性をもっている。それを決定するのは一つの民族、一つの社会的集団がかたちづくっている「社会的現実」である。われわれのことばは主體的な行為であるが、その行為はおのずから社会的現実の制約をうけている。狼の社会で育った少年は狼的な社会の制約のなかでの行動しか知らない。同じように、中国人、アラブ人、アメリカ人などの知覚の型——行動は、個々の具体的な「社会的現実」の制約のなかにある。日本人であるわれわれ一人一人の主體的な行動と日本の「社会的現実」との関係も同様であって、いわば、ことばは人間の主體的行為と客観的現実とのあ

いだのディアレクティックな交渉のなかから生れたものである。逆にいえば、「社会的現実」の変革によって、われわれ日本人の知覚の型や行動の特性も、相互作用的に変えることができる。

こう考えると、「文体」の問題は一つの側面として、個々の作家たちと、日本の近代の「社会的現実」とのあいだの動的な交渉の過程の問題だということになる。どのような状況のもとで、彼らはどのように行動し、その行動は状況をどのように変えたか変えなかったか。そのことは実証主義的に編集された伝記のなかよりも、他のどの場所よりも文体のなかからあきらかにされるはずである。なぜなら、そこには行動が凝縮しており、その文体に参加することによって、われわれは彼らのなしたごとくになし、彼らの挫折したごとくに挫折し、彼らの予見したものを見ることができるようになる。これは技術の問題などではなく、現にわれわれがなにをなすべきかということに関係した問題である。実証主義的な作家研究は、生きた行動を、事実の灰のなかに埋めることでしかない。殺したいのか生かしたいのか、問題は基本的には恒に簡単である。いうまでもなく私は生かし、生きる方をえらぶ。

しかし、作家たちは彼らがことばによって行為するというほかならぬそのことによって、ある深刻な困難に身をさらしている。作家だけではない。一般に人間は、ことばによって自由になりながら、そのためにとんでもない袋小路にはいりこんでいる。ことばによって行為する以上、作家や詩人は決して直線的に現実をつくりだすこともできなければ、現実を模写することもできない。世界と彼ら、世界とわれわれのあいだにはぬくことのできない障害がよこたわっている。その故に